馬鹿で出来てる創造神

美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
馬鹿で出来てる創造神

【Ｎコード】
Ｎ４３６０Ｖ

【作者名】
美空

【あらすじ】
神様ってさ　、人に土下座していいの？え？だめ？でもさ……私の目の前見てよ。神様が土下座してるんだよ？
――――――――――――神様に誤って殺された、不運な少女、月乙女颯華≪つきおとめそうか≫のお話です♪
残酷な描写ありは保険です。きにしなくてｏｋ。
戦闘描写少ないかもです。そこは妥協をお願いします（（殴
主人公スペック多いと思われます。
２０１１年１１月２１日、第６部と第９部を編集しました。

プロローグ（前書き）

プロローグ

……神様って、気高くて神々しくて……
何よりも、尊敬できるって感じするよね？
……でも、今私の目の前に居る神様は……
馬鹿の塊で、おちゃらけてて……尊敬なんかできません、って感じ！
こんな奴を尊敬しろなんてさ、無理だよね。
だってさ、考えてみてよ？
「いやぁ、ごめんごめん！」
なんて神様に言われてみ？
「はぁ？」
って言っちゃうでしょ！？
宗教馬鹿にしてるわけじゃないよ？
でもさ……うん。

こんな奴、神様でいいの？

って思っちゃうわけですよ。
土下座して平謝りしてるんだよ？
神様がだよ？
「え？」
ってなるよね？
少なくとも私はなった。

――――――――で、いい加減教えてくれないかな？
何で神様が私に土下座しながら平謝りしてる理由を、さ。

プロローグ（後書き）

短い……

次は長くしないとなぁ……うん。

誤字・脱字等あったらお知らせください。

現状整理

よし、現状整理をしよう。

私は今、何も無い真っ白な空間に居る。

制服を着て。

まず、私は月乙女颯華。

緑桜女学院高等部二年、緑桜学院幼等部の頃から学院に在籍している。

緑桜学園専門寮「赤奏黄寮」寮生、部屋番号５６７番。

月乙女財閥長女、次期当主

うん、記憶はちゃんとある。

じゃぁ、今朝は何をした？

６時に起床して、食堂でご飯を食べて、１時間３０分ぐらいパソコンで嫁と会ってた。

７時半に寮を出て、いつも通り校舎へと足を進めた。

で、朝の学活が始まるまで友達と喋ってて、朝の学活が終わって授業を受けた。

放課後になって、集めてる本の新刊が出るから町に出て、本屋が目の前ってところで……

あぁ、大型トラックが向かってきて……

「私、死んだんだ……」

改めて現状整理すると、寂しいな……

嫁たちに会えないのが。

今朝、あの子と会ったからいいけど……

はぁ。

でも、私が歩いてるときにトラックはいなかったと思うんだけどな？

しかも、トラックの運転席に人居なかったし……

じゃぁなんで、こっちに向かってきたのかな？

私の馬鹿な頭脳じゃわかんないけどさ……

ん――――――……

わからん。

てか、本結局買えてないじゃん。

うわ、私哀れ。

いや、死んじゃった時点で哀れなんだけど。

なお哀れじゃないか。

……さて、現状整理は終わったのだが。

私の目の前で、土下座して一言も話さないこの人は、

誰なんだい？

神様の謝罪内容

「本っ当にすみませんでした！！！！」
「何が？！」
うん、訳を教えて欲しいって言ったのは私だよ？
でも、訳を教えて欲しいのであって謝って欲しいわけじゃないんだが……
「謝った訳を話して下さい」
「怒らない？」
何？私が怒るようなことなの？
「場合によっては怒るかも」
「……取り敢えず、話すね。
えっと、君は死にました。死因は交通事故です。
それで、その交通事故は……僕の所為です。」
今、何か変な言葉が聞こえたなぁ。
交通事故は、コイツの所為？

プチッ
「へぇ、君の所為なんだ？……覚悟はできてるよね？

できてなくても、ボコすけど！」

以下、音声だけでお楽しみください

「ギャース！ちょっ、タンマタンマ！関節はそっちには回らない！痛い！ちょ、真面目に！
痛いって！うわ！骨折れるって！グハァ！」

「グハァ？気持ち悪っ」
「君の所為だろうが！」
　ふーん、私の所為なんだ。
「私を誤って殺したのは誰かなぁ？」
「……僕です。」
「分かってんじゃないの。で、貴方は何者？」
「神です」
「紙ね、分かった。」
「ネ申！」
「神？」
「そう！神様！」
　こいつが神様ぁ？
「うん！僕は創造神！最高位の神だよ！全ての生みの親さ☆」
　☆がムカつく。
　ウザいよ。
「……私をここに呼んだって事は、何か話したいことでもあるんじゃないの？」
「あ、ありますあります！」
「そう、じゃぁ手短に１０文字以上１０文字未満で言いなさい。」
「無理です。」
「即答ですか。」
「はい。」
「……じゃぁ、２０文字以上で言いなさい。」
「僕が誤って殺してしまったので、好きな能力をつけて異世界に転生させます。」
「長い。」
「未満は言ってません。」
「言ってないからね……」
　好きな能力をつけて異世界に転生させる、か……

面白そうじゃないの。
行ってもいいかな。
寧ろ行きたい。
よし、行こうか。

神様の謝罪内容（後書き）

短くてすみません。

誤字・脱字等あれば教えてください。

異世界に行こうか！

「転生、ね……なに？赤ちゃんから？」
「そうなるかな。大丈夫、ちゃんと5歳までは記憶消しとくから」
「そう、ならいいわ。」
羞恥プレイは嫌だから、ね。
誰だって嫌でしょ、自我があって記憶もあるのに赤ちゃんの体験しなきゃいけないなんて。
「……で、能力だけど……」
「そうだなぁ、「想像具現化能力」、「神力」かな」
「ま、そんくらいならいいでしょ。それから、僕の力の一部を渡すね。
一応創造神の力の一部だから、世界史上最強だから。
内容だけど、「身体能力強化」「全知識」「言語」「法則・適正属性無視」「魔力等無限」かな」

チート能力キタ――――――！！！！！！！！！！

「うん、チートじゃないからね。それに、君の体が拒否反応を起こさないから
こんな力あげられるんだからね。まぁ拒否されても身体いじって入れるつもりだったけど。
あぁ、それからね、「性別操作」「種族操作」「不老不死」「不老不死操作」も入れといたから。」
「種族操作ってなに？他はわかるけど。」
「あぁ、たとえば今、君は人間でしょ？
それが、念じれば龍族にも獣族にもエルフにも精霊にもなれるっ

て事。
神にはなれないけど、天使・悪魔にはなれるよ。」
「へぇ……」
「君の事は神&天使・悪魔に言っておくから。」
「あ、それはご丁寧に。」
「いえいえ。持っていきたい物は？」
持っていきたいものか……たくさんありすぎて困る。
ああ、全部データ入力すりゃぁいいのか。
「パソコンで、ケータイと本の内容を全部入力して。」
「はいはい♪」
♪ウザいな。
「したよ。ついでに、僕の知識も入れといたから、全ての事がわかるよ☆」

なんですか、この神。私優遇されすぎでしょ。
てか、☆とか♪とか好きなの？

「別に好きではないかな、気分？」
「へ、へぇ……」
「僕のメールアドレスも入ってるから、いつでも連絡取れるよ。」
「あ、それはありがたいかも。」
「そう？」
「うん！」
「じゃぁ、落ち着いたらこの扉をくぐってね。行けるからさ、向こうの世界に」
「了解。ねぇ、私、5歳になったら捨てられる運命にしといてくれる？魔力無しでさ」
「ん？あぁ、いいよ。そっちの方が動きやすいもんね」

「そういうこと。……じゃぁ、行ってくるね」
「行ってらっしゃい。それから……君は、現世で居なかった事にしておくよ。
本当にごめん。」
「……有難う。気にしてないよ。またね」

異世界に行こうか！（後書き）

うわ、会話文多い。
人物が３人になれば、台本書きになると思います。
誤字・脱字等あればお知らせください

五歳の誕生日

＊＊＊＊＊赤ちゃん歴史飛ばします＊＊＊＊＊

今日は私の五歳の誕生日！父様も母様もお優しい方なんです！
申し遅れました、私はレディウル・ドラグネス。闇属性の八大貴族の一柱です！
通称レルですね。

もういい？いいよね？いやぁ、朝、目が覚めたら記憶戻ってるんだもん、吃驚だよね。
まぁ神がそうしてくれたんだけど。
で、魔力検査があるわけでして。
結局家を出るから、お供が欲しい。
探そう。まずは自分の力を見つけて……
――――――――――――――――――……

……？

居た。

「――――――出て来て、疾風≪シルフ≫」

疾風は今即興で私が付けた。
異論は認めません★↑

『――――――――マスター呼びだしてくださって有難う御座います』

おおぅ堅苦しい。

「ん。疾風、私の中に居たから私の事は知ってるよね？」

『はい。マスターの持っている情報、力等、私が管理しています。それから、マスターには五時間以上の休息は必要ありません。私はまだ未熟なので五時間ですが、慣れれば二、三時間でマスターの疲れをとり、体調、力等を整える事ができます。』

「わかった、ありがと」

疾風って……いいなぁ。なんか。

くそぅ、妹に欲しいぜ！

弟は居るのにな。

「姉さん、遊ぼ？」

噂をすればじゃないか。

名前はリディウル・ドラグネス。通称リル。

私の双子の弟。若干シスコンか？

ちなみに魔法属性は闇、火、風と見た！

「いいよ♪何して遊ぶ？」

「ん……じゃぁさっ鬼ごっこ！」

「鬼ごっこ？いいよ！じゃ、私鬼やるね！」

「うん！」

「いくよー？いーｃ「レル」母様！」

「これから魔力検査をやるわよ^^
リル、鬼ごっこはまた後でね？」
「「はい！」」

魔力検査、か……

「父様の書斎でやるから、分かるでしょう？
先に行ってるわね」
「はい！」

……リルには、言っておこ……

「リル。」
「何？」
「私ね……もぅリルと鬼ごっこできないの……」
「……！どうして？」
「私はね、魔力が無いから……だから、多分魔力検査で無いってわかった時に、
追い出されると思うんだ。」
「そんなの、そんなの！やだよ！僕、姉さんと一緒に鬼ごっこやりたい！」
「私もやりたいよ！だからさ……
大きくなって、また会おうよ！その時には強くなってるから！
会って一目でわかるように、これ、持っててね？絶対だよ！約束だよ！」
「……うん……うん！じゃぁ姉さんはこれ持ってて！」
「わかった！……リル、またね！」

リルから貰ったのは、真ん中にダイヤが付いたシンプルなネックレス。
私があげたのは……
『防御魔法陣を組み込んだ同じダイヤのネックレスですね。』
私が作ったんじゃなくて、神様に貰ったヤツ。
いらないし。

さ、結果も見えてる魔力検査に行きますか！

《皆さん想像が付くと思うので飛ばします》

いやぁ、予想通りで困るね！
あの両親の顔ときたら（笑）

で、テンプレだとここで強力な敵が来てー、王様かギルドマスターが来てー
拾われて養子になってー、最強になるみたいな？

『マスター、前方１０キロ離れた地点から邪龍族王竜が鬼のような形相で向かってきています。』

ここで倒しても意味ないから、ぼーっとしてよう。

ぼーっと。

五歳の誕生日（後書き）

中途半端な終わり方ですみません（汗

誤字脱字等あればお知らせください

マスターについて（前書き）

今回は説明と言うことで、短いです

マスターについて

初めまして、マスターのお付き？というかお供？と言うか、取り敢えず精霊、疾風＜シルフ＞です。
今回は、私がマスターについて説明いたします！（因みに、物語に合わせて編集します！）

名前　ベルレイン・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ

旧名　レディウル・ドラグネス　別世界での名前　月乙女颯華

地位　イグヴィゥ王国第一王女、第一王子婚約者

種族　天使族・神に最も愛でられし者

家族構成
父・ベルスチア・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ
母・レトルーチェ・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ
兄・スチアレーヴェ・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ

誕生年月日　碧耀歴１９７８年処女月３０日

年齢　１２歳

能力　想像具現化能力……名前の通り、想像したモノを具現化させる能力です。
二次元系も可能です。生物を具現化させるのは無理です。
ただし、物を通してなら可能です（ポ〇

モン、遊〇王等）
神力……魔力、霊力、妖力等を一まとめにした物です。
身体能力強化……説明しなくても解るとおりです。
全知識……創造神が持っている知識の事です。私が管理しています。
言語……別名翻訳能力です。言葉を理解し、話し、書くことができます。
ただ、全知識があるので別に無くても支障はありません。
法則・適正属性無視……術等の法則、属性反応の無視です。
マスターは属性・術・技を気にすること無く発動可能です。
魔力等無限……神力の無限です。
性別操作……男・女の切り替えです
種族操作……前話参照です（別に説明が面倒臭いわけじゃないですよ！）
不老不死……説明しなくても解るとおりです
不老不死操作……不老不死を解除することができます。
また、年齢操作もこれに分類されます。マスターは現在、
不老を解除しています。
使い魔　邪龍族王竜・王竜長兼魔族長「フィジア」偽名・ループ
（マスターとの契約により、邪龍ではなく、聖龍となりました）
マスターの脳を具現化したような精霊「疾風」＜シルフ＞
道具　マスターの所持品
別世界の情報・好きなアニメ・写真・イラスト等が詰め込まれたパソコン

リルさんに貰ったダイヤのネックレス

マスターの強さ

今マスターが居る世界で最強なのはギルドマスター兼全帝で、彼を１とするとマスターは１０００００００００００００００００００００００００００００です。

性格について

かなーり天然で鈍感でお人好しです。

この人、疑うって事知ってんの？ってぐらい純粋です。

困ってる人は放って置けないタイプで、皆の妹兼お姉さんって感じです。

また、経験豊富な友達が別世界に居て、話を聞かされていたため、

対処法もバッチリです。

頭脳

ＩＱ２０００以上の天才です。

悪知恵も知っていればよく働きますが、

悪知恵と言う事を知らないので働きません。

身体能力について

今のマスターが体力テストをやれば、

１００メートル走　３秒

握力　平均５００

反復横とび２０秒　１０００回

上体起こし３０秒　５００回

２キロ持久走　５０秒

立ち幅跳び　５キロ

シャトルラン（２０メートル）　１９００回

という結果になります。

公表された内容
名前・ベルレイン・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ
誕生年月日・碧耀歴１９７８年処女月３０日
年齢・５歳
魔力量・九千万（第一王子の最初の魔力が八千五百万）
属性・水、風、土、氷、光、植物、時
使用武器・堰月倫

今公表されている内容
名前・ベルレイン・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ
誕生年月日・碧耀歴１９７８年処女月３０日
年齢・１２歳
魔力量・一億五千万（第一王子の現在のの魔力が九千五百万）
属性・水、風、土、氷、光、植物、時
使用武器・堰月倫
職業・第一王女・第一王子婚約者、召喚魔術師、フィジオ学園得待生

また、最近ではギルド「天の翼」で、「理を支配せし姫」
という二つ名を掲げて、最強夢双状態ですね。
周りからは「理帝（リティ）」って呼ばれているようです。

邪龍族王竜の長に会いました

はい、ぼーっとしてました。
え？だって、ぼーっとしてた方がテンプレ通りの捨てられ貴族じゃん？
邪龍族王竜だったら、ギルドマスターだろうが王様だろうが倒せるでしょｗｗ
『……あの、非常に申し上げにくいんですが……あの王竜、邪龍族王竜の長で、その……』

嫌な予感しかしないなぁ☆↑

『　お腹が空いて怒り狂ってるので、めちゃくちゃ強いです　』

嘗めてんの！？
別に倒さなくてよくねｗｗ
てか王竜の長とかｗｗ
この世界の生物で一番強いじゃんかｗｗ
王竜の長って魔族も治めてんじゃん。
「あ、なんかもうすぐ目の前にいる。そこの邪龍くぅぅぅぅぅぅん！！！！！！！！！！」
取り敢えず叫ぶ。
「誰だ、貴様は……！？貴様、余程我に喰い殺されたいのか？！」
「誰がｗｗで、お腹空いてんでしょ？」
「それがなんだ！我は腹が減っている！貴様、我の生贄になればよい！」

「嫌だ★そーだ王竜の長君、何が好き？」
話を私がリードすれば私の勝ちさ！
［フン、我の好きなものなど、

……カレーに決まってるだろうが！」
あ……カレーなのねｗｗ
「カレー？カレーなら作れるよ？
ちょっと待ってね。」

じゃ、この世界で初めて能力使いますｗｗ
「はい、カレー。言ってくれればもっと出せるから。」
なんか王竜の長、フリーズしてるけど。
『そりゃ、目の前で創造能力使ったら誰だってそうなりますって！』
そうなの？
ハッハッハッ
気にしない気にしない★
「食べないの―？」
［食うに決まってるだろうが！］

２０分後

「ホントにお腹空いてたんだねぇ、王竜の長君？まさか大盛り１００皿食べるなんてｗｗ」
［悪いか？それから、我はフィジア。なにが王竜の長君だ。
確かに王竜の長だが、我にはちゃんと名前がある！］
「フィジア？」
『邪龍族王竜、王竜の長兼魔族長魔王、フィジア。
その性格は破天荒で兄貴分。そのため部下からは慕われる。
過去も現在も使い魔にされた事はなく、その理由はフィジアが強すぎるため。
また、争いは好まないが、空腹になると暴れまくって取り敢えず何か食べようとする。
好物はカレーで、嫌いなものはフェンリルの肉の煮込み。
魔力量は１０００京、属性は火、風、水、土、雷、氷、闇、光、王。
ちなみに、本気で怒るとカレーを食べないと怒りが沈む事が無い。
人化すると、憎まれの対象どころか敗北感がドドッと訪れるほどのイケメンになる。
竜としての年齢は軽く２５０歳。だが、人間としては１４歳。

っていうのがフィジアの情報ですね』
何このチートｗｗ
この世界の平均魔力量って五千万でしょｗｗ
人間で一番多いのがギルドマスターの五億でしょ？
どんだけなのｗｗ

フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。（前書き）

戦闘描写あります。
ですが、私は戦闘描写が苦手なので、グダグダになります。
一応結果はサブタイトルに書いてあるので、
この話はスルーして頂いて結構です

フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。

［お主、名を申せ。］
　あ、貴様じゃなくなった。
「どうして？」
［精霊は連れてるしカレーは一瞬で出すし我を前にしても怯える事なく話している。
　何者だ？］
　ふんふん、要するに私の事が知りたいと。
「ま、いいでしょ。私の名前はレディウル・ドラグネス。」
［！？闇の貴族筆頭ではないか！何故、その令嬢がこんなところにいる？！］
「いやぁ、貴族が面倒臭かったからね？魔力流せって言われても流さなかったんですよ。」

長くなるので割愛。
（小説って便利だね！）（マスター言っちゃだめです！）

［フム……俄かには信じられないんだがな。
　実際にその能力を見せてもらったわけだし。］
『疑問に思うなら、マスターと戦えばいいじゃないですか？』
　おいいいいいいいいい！？
　何故そうなる？！
［その手があったか！］
　納得すんな！

「……で、結局やるのね……」
［ウム！早く用意しろ！我は早く戦いたくてウズウズしているんだ

！」
「はいはい。」
戦闘狂ですかい！？
『じゃ、始め！』
「超電磁砲って、知ってる？」
「……は？」
やっぱり知らないよね～
知ってたら怖いよ（笑）
「こういうの、だよ？」
コインを創造して、電気を纏わせて……っと
1・2・3
「せーのっ」
はい、デコピンで飛ばします★
『マスター、結構楽しんでません？』
あれー、幻聴が聞こえるなぁ★
「ちょ、速いって！」
あれ、キャラ崩壊？
じゃ、続けて、
「私の一番新しい相棒、出してあげるよ♪」
はい、ポ○モンですな。
私の一番新しい相棒は、感（ランクルス）なんだな♪
「感。サイコキネシスでよろしく♪」
いやね、確かに楽しんでるよ？
5歳の子供が王竜、しかもその長を倒したら凄いじゃん？
「うわっえ、ちょっタンマタンマ！」
「いやだ。じゃ、こっからは自分の力で行きますかね！梅ヶ枝！」
○ルコムの空の○跡の主人公の武器ですねー。
できるかね？
「奥義……太極輪！」
おっ、出来た出来た♪

あれ、もう終わり？
フィジアって……
［我が弱いんじゃなく、お主が強すぎるんだからな！］
「はいはい。あ、そうだ。私と使い魔契約、してくれない？」
［なんで］
「え？だって、移動手段はあったほうがいいし、使い魔が居ると何かと便利でしょう？」
『……私じゃ、不満なんですかね、マスターは……』
あ、疾風の性格ネガティブに設定してたの忘れてた。
フォローに困るよね、ネガティブは。
ま、私が設定したの私だから文句は言えないけどさ。
「そんなことないよ？私、疾風が居てくれて凄い助かってるよ？」
『（パアアアアアア）本当ですか！？有難うございます！』
単純♪
でも、疾風が居なくなったら、私鬱状態になるかも（笑）
「で、結局どうするの？」
［……いいだろう、

我、王竜、魔族を治めしフィジア也。
この者、レディウル・ドラグネスとの契約を求めん。
契約するならば、右手を挙げよ。
我は汝と共に生涯を共にし、
我は汝と共に苦難を乗り超える覚悟ができている。
……汝、レディウル・ドラグネスに、契約を求める。］
右手を挙げて……
「我、レディウル・ドラグネス。
このモノ、フィジアとの契約を承諾する。」
あーもう堅い。
堅っ苦しいなぁもう！

［我の瞳に魔力を流せ。］
「うぃ」
瞳に魔力を流して……
お？人化した！
なんだこのイケメソ！
１４歳くらい？
『人化したのは久しぶりだな……』
「じゃ、これからよろしくね！
フィジア！」
『ウム。こちらこそよろしく頼むぞ。レディウル。』
「あ、レルでいいよ。で、フィジアの偽名考えないとね……その口調も直すこと！」
『ど、努力する』
「ん♪疾風、何がいいかな？」
『フィジアさんのですよね？』
てなわけで、疾風と話し合い！

１０分後

「『決まったよー！／決まりましたー！』」
「発表しまーす！」
『フィジアさんの偽名は―、』
「『ループだよ！／です！』」
意味はない！
うん、意味はないよ！
『ループ？わｒ「ん？！」俺はこれからループと名乗ればいいのか？』
「そう！」
『ループ……わかった。』

ドラグネス家に捨てられた今日、
新たな仲間が加わりました☆

世界観についての説明です！

世界名　「デジャルベイスト」
管理者名　上位神・第３６位魔術を司りし神筆頭補佐・イグニル

科学ではなく、魔法が発達した世界。
また、この世界は一つの大陸しかなく、その一つの大陸が一つの国である。

魔法属性　「基本属性」火、水、土、風、雷、氷
「対極属性」光、闇
「特殊属性」植物、時

魔法階級　弱い順から
初級　家事用、軽い模擬戦等で多く使われる。誰でも可能。
中級　学院で習うか、魔導書で覚えられる範囲。誰でも可能
上級　学院で習うか、使い魔に教えてもらうか。誰でも可能
最上級　魔導書を解析するか、使い魔に習うか。努力すれば可能
究極級　研究所に行って魔導書を解析。ＳＳランク以上なら可能
天級　最上級の使い魔に習う。Ｒランクが使用可能
古代級　自力で魔導書を解析して頑張るか、神級の使い魔に習う
帝がなんとか使用可能。
禁忌級　手を出してはいけない階級。フィ

ジアは全然オッケー。

魔導書が出されていないうえ、何らかの犠牲を伴う。

人間で現在使えるのはレルのみ。

疾風も何気に使える。

天滅級　上に同じ

神滅級　上に同じ

使い魔階級　弱い順から　下級　属性獣、またその子供

中級　竜の子供、精霊の子供

上級　竜、霊獣、精霊

最上級　属性神の子供、精霊王達、獣王、王竜、神獣

神級　属性神、神獣王、フィジア、疾風

国名　「イグヴィゥ」

王の名前「ベルスチア・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ」

憲法　第一条　奴隷は一切禁ずる。

第二条　１２歳～３８歳は学園に通う。

第三条　無闇な争いはしないこと。

第四条　先祖、両親を敬う。

第五条　何が何でも感謝の気持ちだけは忘れないこと。

ギルド　「息吹」

唯一のギルド。

ランク　下から　E，D，C，B，A，AA，AAA，S，SS，SSS，X，XX，XXX，J，R，H，G，RH，RG

帝　火帝、水帝、土帝、風帝、雷帝、氷帝、光帝、闇帝、植帝、時帝。

全員ＲＨランクで、時帝はギルドマスターが務めている。
火帝がそろそろ辞め時なお年頃。
使い魔は全員属性神の子供。
火帝、土帝、雷帝、闇帝、時帝は男。
水帝、風帝、氷帝、光帝、植帝は女。

七大貴族　火の「フレア家」、水の「アクア家」、土の「ガイア家」風の「フィル家」
光の「メーバ家」闇の「ドラグネス家」は国民から慕われ、
国からも絶大な信頼を寄せられている。
ただ、闇の「ドラグネス家」が長女を捨てた事は、貴族、国民は知らない。
雷の「ボルト家」は極悪非道、傲慢、無駄に権力を使うので
国民から嫌われていて、国からも信頼されていない。

※氷は王族が担っている

学院　「フィジオ学院」
初等部から高等部までである、エスカレーター式の学院。
入る物拒まずの学院で、人気がある。
国民が（貴族含む）入りたがるのは専ら此処。

「デレス学院」
初等部から高等部までである、エスカレーター式の学院。
入る物を選び、それも実力があっても上位貴族だけしか入れさせない。
そのため人気が無く、入りたがるのは大体「ボルト家」とそ

の血縁ぐらい。

学園に通う年齢は、１２歳から３８歳まで。
１２歳～２０歳…初等部
２１歳～３０歳…中等部
３１歳～３８歳…高等部

因みに、一番難しい問題でも、日本の中学三年生の問題ぐらい。
碧耀歴　「イグヴィゥ」第一の王が定めた年月の数え方。一年が３９０日。

寿命は男女ともに２００歳前後

月　別世界とは違い、十三の月がある。
一月…白羊月
二月…金牛月
三月…双児月
四月…巨蟹月
五月…獅子月
六月…処女月
七月…天秤月
八月…天蝎月
九月…人馬月
十月…磨羯月
十一月…宝瓶月
十二月…双魚月
十三月…蛇使月。

曜日、お金は別世界と同じなので割愛

世界観についての説明です！（後書き）

訂正する可能性があります。

半分強制（前書き）

今回は、限りなく。恐ろしく。短いです。
そして、終わりが中途半端です。

半分強制

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっっ！！！？？？」
――――――――――――――幻聴が聞こえる。
声からして、十歳前後。で、男子。
少なくとも、今の私よりは年上だね。
で、声は聞こえたけど助けには行かない。
え？五月蠅いな、私は平凡がいいんです、王族とかに拾われても良いけど影の最強になって
さりげなーく世界に影響を及ぼすような感じがいいんです。
『マスター、その時点で平凡じゃないですよ？』
疾風、そこはつっこんじゃいけません。
とにかく！私は！めんどくさい事は嫌なんだ！
と言う訳で……

「聞こえないふり。」

『声に出てますよ？』
『レルよ、行かぬのか』

……なんだよ、そのジト目は。
私は何も聞いてないんだよ。
見ざる言わざる聞かざる！
フラグには手をつけないんだ！

『……（ジト目）』

『（ジト目）』

……

「あーもう！行けばいいんでしょう、行けば！？」
『さすがマスター！』
『では、行くとしようか』
何がさすがだ何が！
半分強制だろうが！

「どうなっても知らないからね！出てといで、聖夜！（トゲキッス）」
『声がしたのは南南西に五百メートル、です』
「だってさ。聖夜、声を辿って。」
【了解♪】

……あ、ポケモンと会話可能なのね。

第一王子（前書き）

短いです。中途半端です。

第一王子

……さてさて、半強制的にこちらに来たわけですが。
別にそこまで騒ぐ必要無くね？って言う感じの、それはそれは勇ましい大狼が居る訳です。
『そう思うのはマスターだけですよ？使い魔階級で言えば中級。
魔獣階級で言えばBランクです。』
「これが？」
だめだ、ループと戦って？から、感覚が鈍ってる。
『それでは、俺が化け物みたいではないか。』
『？違うんですか？』
「違うの？ってか、心読むなっつの！」
『『声に出てました／出てたぞ？』』

／（ °ロ／）（／ロ ° ）／

「さーて、男の子？を助けに行こうか！」
『話逸らしましたね！？』
『む……』
気にしない気にしない★

「あ、いたいたー。」
さてと、演技でも開始しましょうかね
「君―、大丈夫？」
？「……っ、」
「意識はあるね♪名前は？」
？「……スチアレーヴェ・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥ……」（以下、レ）

王族キタ――――――――――――――！
しかも！第一王子！てことは……八歳？
助けなければ不敬罪！？←ｗｗ

「記憶もあるか……じゃぁ、どうしてこんなとこに居たの？」
レ「……／／／／（プイッ」
「？」
『マスター、深く追求しないであげてください。』
『あぁ、このくらいの年頃なら仕方ないだろう』
……？

あぁ、解った解った！
冒険ね！
「……一人で帰れる？」
レ「……無理。立てない」
…痛めたか……
仕方ない、送ってくしかない。

それにしてもこの王子っ

可愛い！何この子！？完璧なる男の娘っ！
「じゃぁ、送ってくよ！何処まで？」
レ「……王宮。門の前でいい。」
「了解！じゃ、行こう？えと、」
レ「……あぁ、レーヴェでいい。……お前は」
「ぁ……、レディウル・ドラグネス。」
レ「……ドラグネス家の者が、なぜここに居る……？」
へぇ、もぅ七大貴族とかの事習ってんだ？そりゃそうだよね、第一王子であるレーヴェは。

正統王位継承者、だしね。
大狼が警戒、強めてきた。
早く行かないと。
「……私、捨てられたからさｗｗ貴族って、力第一主義じゃじない？
で、そんなところが嫌になってきたから。魔力流せって言われても、流さなかったの。
そしたら、
「我がドラグネス家に恥をかかせるな！この魔力無し！今すぐこの家を出て行け！」
って言われたから、出てきた♪あ、好きな風に呼んでくれて構わないよ」
『（マスター、演技忘れてます。）』
レ「……そうか。取り敢えず、王宮まで頼むぞ、レイ。」
「レイ？まぁいいか、はいよっ！任せて♪眠（ネムリ・種族スリーパー）！」
眠【……】
……眠そうな顔してんな、コイツ。
もちっとシャキッとしろやシャキッと！
……なんて言った無駄だよね、コイツだもん。
あ、今の何気に失礼だったｗｗ
「さて！レーヴェ、王宮を想い浮かべてね？」
レ「え？あ、あぁ。」
「眠、《テレポート》」

さてと。
やっとこの森から抜け出せた！
なんか後ろから＜ワォーン＞って聞こえるけど気にしない気にしない。
気にしたら負け負け。
王宮って、やっぱり豪華なのかな？取り敢えず、着いたら拝んどこ

うか。

謁見準備

私は今、侍女さんに、無駄に大きいお風呂に入れられてます。
無理矢理。お風呂位、自分で入れます。
「あの、本当に大丈夫ですから。」
「ダメですよ、レイ様っ！」
「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」
「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さいっ！」
「……解りました」
……何気に？レイ？定着してるし。
どんだけ凄いんだレーヴェパワー。
『マスター、いいじゃないですか♪第一王子に名前を与えて頂いたんですよ！？』
いやいやいや、与えて頂いたんじゃないから。
好きな風に呼んでいいよとは言ったけど、名前くれなんて言ってないから。
『あのですね！この世界で、殿方が女性をあだ名で呼ぶなんて無いんです！
呼ぶとしたら恋人同士か幼馴染、家族、または夫婦ぐらいです！』
へー、そんなのあるんだ。面倒臭いね。
で？それとこれとで、何の関係があると？
『マスター、いいですか！？？レイ？は、言わば第一王子が考えたあだ名！
名前を与えて頂いたのと同じです！』
へーふーんほー。はいはい、少し落ち着こうね。
っと、やっと身体、洗い終わったみたいだね。なんか後ろから、
――――――すべすべしてて洗いがいがあったわ！
――――――うらやましいわ……
なーんて聞こえるけど気にしない気にしない。

「レイ様、お召し物はどれにいたしますか？」
「え？あ、じゃぁ……お任せして、宜しいですか？」
「！！！！！！はいっ！！！！！！！
不肖ライラ・バルドー！誠心誠意込めて選ばせて頂きます！」
「よろしくお願いします、ライラさん。」
別にそこまでしなくても良いのに、
『よくありませんっ！
マスター、もうちょっと自分が客人だという意識を持って下さい！』
疾風。的確すぎる指摘を有難う。
そうです、私は客人でした。
いやぁ、忘れてた忘れてた☆
ちなみに。
今、服を選んでくれている、元気で少し危なっかしいのがライラ・バルドー。１３歳。
で、「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」が、お姉さんみたいに優しい雰囲気を持ってる、真面目で頭もよさそうなのがエル・レイナ。１３歳。
「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さいっ！」が、この三人のまとめ役で、なんと侍女長。ハイナ・エルフィニム。１５歳。
貴族の方は、学校に行くも行かないも自由らしい。
ただ、跡取りは学校に行かなくてはいけない。
この三人は貴族で、跡取りの妹だから学校に行ってないらしい。
勉強は皆できるみたいだけど。
てか、ハイナさんｗｗ
あんたどんだけ優秀なんですかｗｗ
ラ「レイ様。こちらで宜しいでしょうか？」
「……可愛い。ライラさん、これがいいです。」
ラ「有難う御座います！では、エルとハイナさん呼んで来ますね。」

ライラさんが持って着たドレスは、淡い桜色が上からグラデーションになってて、
ドレスのすそには控えめにレースが付いてる。
全体的に、纏まりがあっていい感じ。
柄が裾の方に一つ、大きな蝶があるだけで、柄物が嫌いな私としては嬉しい。
でも。
「私、ピンク系着た事ないんだよね……」
『大丈夫です！絶対似会います！』
「疾風、あんたは何で興奮してるの……」
『興奮してませんよ？』
「してたでしょう。」

え？ループ？
ループなら、客室で待ってるよ？

『レイと疾風、遅いな……

謁見、大丈夫だろうか？』

心配性なループでした。

謁見→婚約者→養女？

エ「レイ様、これから陛下と謁見して頂きます。
　その際ですが、レイ様流の敬意の表し方で結構ですので、
　陛下に対して、無礼がないようにお願い致します。」
「あ、はい。わかりました。」
私流の敬意の表し方？
じゃぁ、向こうで習ったものでいい。ってこと？
てか、五歳児にそんな事要求しないでほしい。
あ、でも演技の事すーーーーーっかり忘れてたからいいのかな？
エ「あ、それとですね。レイ様が、殿下と共に、
　この城に来る時に乗っていた生物をすぐ出せるようにして頂いても宜しいですか？」
……私、何に乗ってきたっけ？
『聖夜です』
そうそう、聖夜だ聖夜。
結局、眠がテレポート失敗したから聖夜で来たんだっけ。
「わかりました」
疾風、よく覚えてたね。
凄いや。
『当然です。まだ、一時間前ですよ』
五月蠅いな、私は記憶力だけは無駄にいいけど
どうでもいい事だけは覚えないの！
エ「では、行きましょうか」
「はい！」

この人が王様……
威圧感半端ねぇ。
お妃さまは綺麗だなぁ……

目の保養になる……
「お初にお目にかかります。
元、ドラグネス家長女、レディウル・ドラグネスと申します。
この度はお忙しい中、私のような物のために時間を取ってくださり、ありがとうございます。」
……あぁ、嘆かわしい。
何だってこんなこと言わないといけんのさ！
いやね、最低限の礼儀だけどね！？
私は堅いの嫌いなんだよ！
わかる？！
わかんないよね！？
王「そんな堅くなるでない、レイよ。さて、気になる単語が出て来たのだが？」
「……元ドラグネス家長女、ですか？」
王「うむ。今日発表された限りだと、
ドラグネス家には長男、リディウル・ドラグネスしか居ない筈であるが？」
一週間たって、ようやく発表されたんかい！
「はい。私は、そのリディウル・ドラグネスの双子の姉です。
いえ、元、と言った方がいいでしょうか？」
王様もお妃さまも、眉間にしわを寄せないでください。
妃「どういう意味です？」
「私は、魔力が無い、という理由で捨てられました。
まぁ、実際にはあります。
それを証明してくれるのが、疾風です。」
妃「疾風？何です、それは」
「私に仕えている精霊です。呼びましょうか？」
えっと、お妃さま？目が爛々と輝いているのはなぜですか？
この目は、「可愛いのかしら！？」って言ってますよ？
妃「お願い」

「わかりました。《疾風。私のところに来て、お妃さまに会って貰うわよ》」
『はい、何でしょうかマスター！』
早いなおい。
「まずは、陛下と妃さまに自己紹介。」
『はい！初めまして、私はマスターの魔力によって出来ています、マスターの精霊疾風です！』
簡潔に述べるとそうなるね。
もう少し詳しく言った方が……
『詳しく言うと、私はマスターの魔力を五歳まで抑え込んでいました！
強すぎるので、母体にもマスターの身体にも悪影響を及ぼす可能性があったんで。
私はマスターの魔力その物です。
で、今のマスターの魔力は、あの邪龍族王竜類王竜長よりも多いんです！
なんと、無限なんですね！それに、マスターは何故か天使族なんですよ！
おまけに、邪龍族王竜類王竜長、フィジア、偽名ループを使い魔にしたんです！
しかもです！マスターは、この一週間で神滅魔法まで使えるようになったんです！
もう凄いですよね！ちなみに、マスターの魔力である私も神滅魔法使えます。』
「疾風、最後にさりげなく自慢せんで宜しい。」
『はい、すみませんマスター』
あー、音声遮断結界と暗黒結界張っといてよかった。
大臣とかに聞かれたらただじゃ済まされないからね。
王「その話は本当かね、レイ」
「本当です。」

妃「本当に？」
「はい。何だったら、今ここで神滅魔法を放っても良いんですよ？
それとも、天使の姿になりましょうか？
それとも、ループを呼びますか？」
王「……いいだろう、その話を信じよう。」
妃「さてと、お礼をするわね。」
王「先程は、アレン……スチアレーヴェを救ってくれて、」
妃「本当にありがとう。礼と言っては何なんだけど、」
王「アレンの婚約者に、」
妃「なってみない？」
何ですかこの夫婦の以心伝心ぶりと言うか阿吽の呼吸と言うか。
それに、今レーヴェの婚約者？
いや、別に嫌じゃないし寧ろなりたいぐらいなんだけど、
「私は、今は身元がはっきりしていません。」
妃「なら、ウチの養女になればいいわ。」
そんな即答しないでください、お妃さま。
反応に困ります。
確かに兄妹婚は認められてますけど。
王「む、いいかもしれん」
王様もそこで納得しないで。
「……宜しいんですか？」
妃「いいわよ？」
王族になる＝世間に注目される？
目立つのは嫌いなんだけど、
まぁいいか。
「じゃぁ、よろしくお願いします。」
あとで、ループに報告っと。
反対はしないと思うけど、取り敢えず報告っと。
あれ？そう言えば、私聖夜出してないぞ？

そして？かどうかは知らんが七年後。（前書き）

短いです。
まぁ、はい。

そして？かどうかは知らんが七年後。

「アルファさん、私、学園では護衛必要なんですけど……」
アルファさんとは！
私の専属護衛で、年齢は２３歳エリートである！
ア「ですから、レイ様。そういう訳にはいかないんです。」
「だって、護衛が居たら注もｋ「大丈夫です、貴族も護衛をつけますから。」はぁ……」
どうしてそこまでして護衛をつけようとするかな？
なんで？
もしかしたら、レーヴェ兄様かな？
過保護だからなぁ、うん。
「……分かりました、分かりましたからこの距離はやめましょう。近すぎます。」
ア「え？あ、す、すみませんっ！」
明日から、学園か……

リルに、逢えるんだね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カバンよし。カバンの中身よし。制服も校則を守ってる。こんなもんかな？」
『マスター、学園長との約束の時間まであと３０分ですよ？』
「え？あ、《転移》で行けばいいじゃない、任務で行ったことあるんだし」
　私は今、世界で最強だと謳われる、ギルド「天の両翼」にて、「理を支配せし姫」って事で最強状態になってます。無双だぜ☆
「ルークは、精霊界でも天界でも好きなところに居ていいよ。でも、学園には来ないでね？」
『分かっている。』
　魔力が多いから、召喚の方がよくね？ってことで、学園には？召喚魔術師？として行くんだからね。

下手にルークに出てもらっちゃ困る。
「疾風、あんたは姿隠してなさい。」
『はい、マスター！』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ア「レイ様、失礼しますよ？」
アルファが来た時。そこには、暇を持て余したルークしか部屋に居なかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

学園長

「学園長室は……っと」
この学園、無駄に広くね？
こんなに広くなくていいじゃん。
何でこんなに入組んでんの？
「お、みっけ。」
さっすが学園長室、扉も豪華。
無駄に金かけてるね。
「この魔力は……」
アイツか。
よし。
「せーの、どりゃー。」

ドカッ

バキッ

「ふぎゃっ」

ズドォォォォォン

［やる気が感じられませんよ？］
やる気ないもーん♪
てか、変な声聞こえたんだけど？
幻聴だよね。
空耳だよね。
まさか、
「まさか、

？闇力の覇者？って言われてる、闇帝兼天の両翼ギルドマスターが、
ココに居る訳ないもんね？」
「そのまさかだからーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
「五月蠅いよ、ルアル。黙れ。」
「はい。」
……よわ。
何だこいつ。
Gか？Gなのか？
Gみたいにしぶとい癖に弱い……
「Gだな。」
「？Gって何？」
あ、そっか。この世界にGはいないんだ。
「……何でもない。
何でもないから、要件をさっさと言って。」
「はい！あのですね、特待生の証の、このネクタイを着けて頂こうと！」
「ネクタイ？え、何？このリボンと変えんの？」
「いや、好きな所に着けてくだされば！」
「あ、はいはい。わかった。それだけ？」
「あと、この生徒手帳です。詳しくは、開けば解るんで。寮の部屋は最上階です。」
「了解。じゃぁ、寮の部屋行ってくる」
「ハイ！」
「んじゃね。あぁ、それと。

敬語、ウザいよ♪」

［マスター、それはルアルさんが……；］

「酷いよーーーーーーーーーー！！！！！！理不尽だ――――――！」

後ろから叫び声が、横から叫び声に同情する声が聞こえるけど……

気にしない気にしない♪

ルアルって、今年で何歳になるんだっけ？
なーんか幼稚な気が。
［ルアルさんは、今年で４０歳ですよ？］
へぇ、未だに独り身とはね……
まぁ、でも……学園出て、まで２年しかたってないから……仕方ない、のかな？

自己紹介（前書き）

色々と短いです。

内容薄いです。

それでもいい、と言う方のみどうぞ。

後で、ちゃんと？ここで出てきた人の説明書きますんで。

自己紹介

「俺がこの1年S組の担任、マコト・アラセだ！
俺の給料が減るような事すんなよー？」

（ー―ー）！！

え、何で日本人ネームｗｗ

後で話聞こう。そうしよう。
あ、でもその前に寮で検索するか。
ま、どっちでもいいっしょ。
「んじゃ、それぞれ自己紹介しろよー。

・　名前と属性、攻撃タイプと一言で、簡潔に頼むぞー」
・　・　・
「メール・フレアだ！属性は火と風、攻撃タイプは武器による近距離攻撃！
七大貴族とか、気にしないでくれよな！」
アランだ。弄るの決定だな。
……こうして見ると、メーバ家とボルト家が居ないんだ。
まぁ、メーバは来年入ってくるけど。
リルも、いる。
「クルフィ・アクアです。属性は水と光、攻撃タイプは魔法と弓による魔弓攻撃。
私もアランと同じなので、気にせずに話しかけてくださいね」
・
「ミユル・ガイアだ。属性は土と氷、攻撃タイプは魔法による遠距離攻撃。
あーまぁ、そのなんだ。俺もアランたちと同じなんだが……
俺から情報を買うときは、それなりの対価を持ってこいよ？」
・
「フィリア・フィル、属性は風と水。攻撃は体術と魔法による近距離か遠距離攻撃。
私もアランたちと同じだ。よろしく。」
・　・

・
・
「リディウル・ドラグネス、です。属性は闇、火、風。攻撃タイプは中距離攻撃。
えと、僕もアランたちと同じなので、よろしくお願いします。
あと、私事ですが。ココに姉さんが居たら、早く僕の所に来て下さい。
約束、忘れたとは言わせませんから。」
忘れる訳。ないじゃん。
・
・
・
・
さて、私の番。
「ベルレイン・フォン・イグルス・二キリル・イグヴィゥです。
属性は水、風、土、氷、光、植物、時。
攻撃タイプは召喚又は魔法、武器による全距離攻撃
ここは学舎、身分制度は関係ありません。
なので。仲良くしてくださいね！あ、ベルって呼んでください。」

よし、第一関門クリア。
次は、リルに会うこと。

あ、そういえば何か忘れてる。

なんだっけ？

「ベル様！やっと見つけましたよ！」
「……あ、アルファさん。あ、皆さん、こちらはアルファさんです。」
「え？あ、申し訳ございません。アルファ・スラード、第一王女専属護衛騎士、攻撃タイプはまぁいろいろです。宜しくお願いします。」

因みに。
この後、私はアルファさんからお小言を頂きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4360v/

馬鹿で出来てる創造神

2011年11月22日01時16分発行